

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

和田洋一著

『新島襄』

人と思想シリーズ——

日本基督教団出版局、B6判
三〇二頁、八五〇円

本書は日本基督教団出版局により「人と思想」シリーズ第二期の一冊として発行されたものである。その計画によればアウグスティヌス、キェルケゴールなど古いものからカール・バルトなどに至るヨーロッパの思想家一三名、新島襄以下明治、大正、

昭和三代にわたり日本の思想家八名が選ばれておる。

新島襄は J. D. Davis 著、山本美越乃訳補、新島襄先生伝（明治四〇年五月三版、警醒社発行）をはじめ、日本語で書かれたものが一〇種を越えている。そのなかでここに紹介する新島襄は最も優れたものであろう。

その内容を簡単に述べると、序章として新島の家系、幼・少年時代を述べているが長州や薩摩の青年たちが藩の内密な留学生として国外に脱出したのと比較されているのは、新島の場合の悲壮な情況が浮き彫りにされておもしろい。

第一章「自由と文明へのあこがれ」は国外脱出の動機、江戸から函館、函館からボストンへと脱出した有様が記され、第二章はアメリカ滞在中のこと、第三章は同志社創立、第四章はそのための東奔西走。ここでは特に自責の杖、自由民権派との接触、欧米再遊、教派合同問題、同志社大学設立の旨意、五平伝説、寒梅の詩、遺言、で終っている。巻末に略年譜と参考文献があげてある。

さて、本書を読んで私が感じたことを述べると次のようにいうことができるであろう。

第一、本書は大層読みやすく書いてある。書中の事件や人物などに対する著者の同情と理解が著者の解釈のなかに溢れていて、読者は知らざるうちに読まされる。伝記文学の一つの型といえよう。

第二、本書は学的な正確さに努めている。事実を重んじていることは本書の中心的特色といつてよい。そのためには記事の拠点たる文献を忠実に示している。のみならず、とかく新島襄は先生として理想化されやすく、そのイメージは虚像になりかねないこともある。著者はその点について特に留意して実像を画かんとし、函館紀行の叙述も遠慮なく新島の若き頃の問題をとりあげている。

第三、著者が特定の派閥に属していないことが判断の公正を保たしめておるように思われる。例えば日基と組合との教会合同問題に新島が反対した動機の解釈についても、新島を非難する植村正久の意見も、弁護する柏木義円の考えも共に引照し、物心

両面において離れ難きアメリカン・ボードとの関係が新島を支配したことを重視しながら、同時に結局日基督教の寡頭政治を恐れたことがその真因であるとなしている点など公正な判断の一例である。

本書は従来の新島伝の批判積み重ねの上に立てられた最新の労作であって、当分この上に出るものは現われまい。書中板垣に宛てた手紙のなかの、新人、新心論は新島を伝えるものの白眉である。著者がキリスト者であり、同志社人であることは新島伝の作者として大切な資格であり、新聞学の教授たることはさらに偶然の好条件に恵まれたものであろう。

(大塚節治・前同志社総長・現大学名誉教授)

高道 基 著

『山室軍平』

— 人と思想シリーズ —

（日本基督教団出版局、B6判）
二九二頁、八〇〇円

御所のみどりと同志社の赤瓦、そしてその背後にある相国寺の黒い屋根は、一つの調和をなしている。その中で一きわ目立ってそびえているのがクラーク記念館である。その赤い尖塔は同志社の建物のシンボルとなっている。クラーク記念館の二階にやや黒ずんだ胸像が壁にぎざまれている。偶像を極端に嫌ったカルヴァンの流れをくむニューイングランド・ビュリタンズの影響もあつてか、同志社には不思議と銅像というものがない。しかし、クラーク館の二階の胸像だけは例外中の例外である。それは、良心をもって神と人民のために尽くすという同志社精神をもって生涯を闘い抜いた人を記念しているからであらう。

その胸像は、山室軍平の姿をあらわしたものであり、その横に、「神と人道の為に」と刻まれている。

山室が同志社に学んだのは、一八八九年から一八九四年であり、このクラーク館が出来たのは、一八九二年であるから、当時二十才の苦学生山室は毎日重い足どりをもって、真新しいクラーク館の階段をのぼりおりしていたにちがいない。

山室軍平が日本救世軍の創立者であり、近代日本の社会事業の先駆者であることは広く知られている。しかし、彼がどのような遍歴の生涯をたどり、どのような苦難のなかに事業を遂行し、どのような視点から思想を形成して行ったかは、あまりよく知られていない。彼は、クラーク館に埋没されてしまいうのである。

高道さんの山室伝は山室軍平を現代のなかに浮き彫りにしてくれる作品である。山室は、彼を慕う少数の人々の間では深く敬愛されているが、戦後の新しい世代にとっては伝説の人となりつつあった。しかし、高道さんの山室伝は、地道な資料的な検証をふまえた上で、現代の意識とパトスをもって山室軍平をえがいている。高道さんの文章には山室の内的なたたかいと磨かれた人々へのひたむきな山室の情熱が、熾烈に表わされており、一読して鮮明な感動を禁じ得ないものがある。

これまでも、山室伝にはいくつかがあった。それらの多くは、山室の内側のサークルの人々によるものか、伝記小説的な物語風のものであった。それに比して、高道さ

んは、多くの資料を多角的に用い、当時の社会状況の推移との関連において、人間山室のたたかひのあとを刻明に辿っている。ここでは山室が英雄として仰慕されていない、山室は、時代を超えた行者として別視されていない。明治から大正、昭和にかけての、日本の資本主義と軍国主義の進展の谷間にあえぐ一人の人間としてのリアルなたたかひをえがいている。こうした問題意識は、同志社大学の人文科学研究所でなされている「キリスト教社会問題」(略称C・S研究会)についての共同研究に共通した視点であり、高道さんもC・S研究会の会員として永年にわたって研究にあたっていたメンバーであり、本書もそうした背景から生まれた貴重な研究成果であると思う。この点においては、同じ「人と思想シリーズ」(日本基督教団出版局)の一環として最近出版された、和田洋一氏の新島襄と岩井文男氏の海老名弾正も同様に同志社のC・S関係者による同志社人の伝記を社会的関連のなかにとらえたものとして注目することができる。

いささか私事にわたって恐縮であるが、

想い出として申しのべさせていただくと、右の、人と思想シリーズの企画に私は委員として参画していた。あるとき、都合によって一回委員会を欠席したのち、次回に出席すると、海老名弾正を東京神学大学の大本英夫氏が、山室軍平を加藤常昭氏が書くという案ができていた。私は、大木さんにしても加藤さんにしても、それぞれ特色のある伝記を書かれることには疑いはないがこれらの人々については、同志社の関係者のなかで打ち込んで研究をしている人々のあることをのべ、岩井さんと高道さんに、それぞれ執筆をおねがいすることになった。

事実、山室研究にかけた高道さんの情熱はすさまじいものがあつた。あの痩せこけたからだのどこに燃えたぎる生命が隠されているのかと思うほど彼は打ち込んで本書を書きあげた。炎暑のなかに、彼は衰えるどころか山室の人権のたたかひにふれて燃えていった。そのことは、編集にあたった出版社の担当者を感じさせたほどであった。

著者は一つの問いをもって本書を綴って

いる。

『「人権」の思想はいまだ定着をみず、「いかに生くべきか」という人間の価値の領域は見失われ、高度経済社会とよばれるわれわれの状況の底には、孤立をかこつ多くの人々の苦悩の累積がある。この暗さを「神蝕」(M・ブーバー)とよぶのは見当はずれのことだろうか。』

山室軍平の生を灼熱させてやまなかったものは祈りであった。一步を進めるごとにBe with me, Go with meと祈りながら日本近代の圧倒的な暗黒の領分に歩みこんでいった彼の敬虔な足音を、われわれの時代はどう聞いたらいいのだろうか。』

高道さんは、近代日本人権史の中で、山室軍平の苛烈な戦いをとらえるにあたって、山室の「聖潔」についての思想と生涯という点に焦点をしばって叙述をしている。『山室軍平の生の軌のあとをたどってみると、その車軸にあたる部分に「聖潔」の体験がどっしりと座っていることに気がつく』と著者はいう。そして、本書の終章は「聖潔の一生」という文章によって結ばれている。それは、長い精神的放浪の旅の

のちにたどりついた山室の心境であり、それだけに、困難な彼の働きにあって、彼をたじろがないものとした精神的基盤であった。「聖潔とは山室にとって、すべての罪より潔められ、神を愛し、人を愛する全き愛の人となることにほかならなかった。」(二六四頁)と説き、そこから、彼は社会実践にあたったことを指摘している。

このことは、信仰の契機が人間を社会から離反させるのではなく、また、社会的行動によってキリスト者が信仰を喪失するのではなく、信仰によって「聖潔」を指向するものは、ますます社会の底辺にあって苦悶する人々に仕えてゆくという社会実践に向かって行くことを物語っている。そして著者は、

『「救われんために救われたり。

仕えんために救われたり。」

日本救世軍のかかげた聖潔のモットーは不滅である。』(二八二頁)ということばでこの伝記を結んでいる。

山室軍平が岡山の山間に生まれてから、昨年でちょうど一〇〇年、同志社で学んでから八〇年の記念すべきときを迎えるにあ

たって、最も彼にふさわしい伝記が現代の問題意識をもって綴られた。これにまさる記念の賜物はないといってよいと思う。この時代に生きる同志社人の一人として、山室の足跡を省みると共に、その精神に学び生くるものでありたいと思う。

(竹中正夫・大学神学部教授・宗教学)

森田雄三郎著

『シュヴァイツァー』

——人と思想シリーズ——

(日本基督教団出版局、B 6 判
三二八頁、九五〇円)

「あなたの尊敬する人物は？」と聞かれて、シュヴァイツァーの名をあげる人は少なくない。かれについては、すでにわが国でも多くの書物が出版されている。しかし神学者として、哲学者として、音楽家として、また医療奉仕者として、そのどれ一つをとっても傑出したこの人物の全貌をとらえることは、実は決して容易ではない。か

れの学問と芸術と奉仕活動とは、どのような有機的連関をもっていたのであろうか。

今度、日本基督教団出版局の「人と思想シリーズ第2期」のトップをかざるものとして出版された本書は、このような問いに答えようとする意欲的な書物である。著者は本学で長く宗教学を担当している学究で、本書とはほぼ同時に、『キリスト教の近代性』という大著をも世に問われており、まずその努力に深い敬意を表したい。

さて、著者によれば、「シュヴァイツァーの思想は、思想それ自体のうちに統一をもつというより、かれの生活そのものに根ざし、生活そのものの人格的内奥に統一の根拠をもっている。」この統一の根拠こそ、シュヴァイツァーが、「精神」と呼ぶもので、「人間の内的思想と外的行為を通してその輝きをあらわし、これらに統一的发展を与える。」従って、かれの内的思想のみを内省しても、外的行為のみを観察しても、その統一像はえられない。そこで、著者は、一応本書の叙述を、「I シュヴァイツァーのおいちと活動」と、「II シュヴァイツァーの思想」にわけつつも、たえず相互を関

連づけつつ、シュヴァイツァーの統一像に迫ろうとする。

本書があきらかにしているように、「わたしに従って来なさい」というイエスの呼びかけと、キリストとともに死んで復活するパウロのキリスト神秘主義とが、奉仕者としてのシュヴァイツァーを生涯ささえたづけした信仰の生命であった。それは、イエスに従事するかぎりのヒューマニズムともよぶことができる。そして、この生命の原点ともいうべきイエスやパウロの歴史的なすがたと意味とをあきらかにすることこそ、神学者としてのシュヴァイツァーの生涯の仕事であった。著者は、シュヴァイツァーの学問的方法是決して過去のものになったとはいえぬ、ということ強調する。著者によれば、ブルトマンの非神話化の提唱も、原理的にはそれほど新しいことではない。「終末論的イエスの解釈にかかわる神学と歴史と哲学の関係は、原理的にはほとんどすでにシュヴァイツァーに見出される」のである。

それにしても、かれのイエス・パウロ理解と、「生命への畏敬」という思想は、ど

のようにつながるのであるか。この点の宗教哲学的媒介は、「シュヴァイツァーにおける最大の思想弱点」であると著者は見る。「シュヴァイツァーでは、神学的反省と哲学的思索があまりにも相互に分離」されている。著者は、この点について、『キリスト教の弁証』に示された田辺元の弁証法的媒介を高く評価している。

著者は、さらに、シュヴァイツァーの倫理についての田辺元の批判をみとめて、非神話化された終末論的倫理は、個人道徳のみならず、進んで社会倫理に媒介されねばならないと強調する。社会倫理という場合に、状況への即応ということが大切なことはいうまでもない。著者は、日本の状況については、階級闘争理論の否定媒介的な使用の必要性をさえ語っている。このことの当否はともかくとして、これは、シュヴァイツァーの思想を批判的に生かすことになるとのであろうか。ちよつとすると、根本的批判・否定に通ずるのではないであろうか。今日、急速に変りつつあるアフリカ的状况の中で、シュヴァイツァーに対する手きびしい批判・否定が出て来ているという

ことも耳にするので、この点を、著者ももう少しつっこんで説明してほしかったよう
に思う。

(幸 日出男・大学神学部教授・宗教学)

西尾 昭 著

『風よ 地中海よ』

(京都エディター、B6判
二二六頁、七八〇円)

川喜田二郎さんの論文「山と谷の生態学」によると、ネパールの村はたいてい丘の上にあり、畑作中心だという。「暑くて不健康な谷間をよけたのである。そこはマラリアの巣窟であった」と、川喜田さんは推論している。灌漑用水のえやすい山麓や山間盆地に集落をつくった稲作中心の日本とは、異なる面が多いらしい。

西尾昭教授のイタリア紀行いやイタリア文化論『風よ 地中海よ』を読みながら、右のネパールの話をふと思いだした。イタリアでは都市の多くは山頂にあり、鉄道沿

「一なぞあのようにな不便な山頂に住まねばならぬのかと思いたくもなるが、なだらかなその頂上は、外敵やマラリアの蚊から逃れるのに適した土地」だったからだろうと、西尾さんはいう。壁をめぐるしたその小都市の市民は、国家意識よりはむしろ郷土意識がつよく、自分の都市が自慢であり、人なつこく親切だという。

そういう小都市をはじめ、南部の片田舎や島々を、驚きと好奇心に眼をかがやかせてめぐり歩いた西尾さんは、各地で出会った素朴な人間味、ゆたかな食事や地酒、宗教心、歴史、中世以来ほとんど変わっていない都市のたたずまいなどを、やや熱っぽい調子で語る。「万事が画一的な」プラスチックの国。「流通機構が発達しすぎて」ローカルなカラーや味を失った国。非個人的な大都市へやたらに人口が集中する国。そんな日本から訪れた者の眼には、すべてがなつかしくそして新鮮にうつるのだ。つまり、日本の現実を写す鏡がそこにある。

ひとつの都市なり地方が明確な個性をも

つにはながい歴史と、住民の郷土主義とでもいうべき愛と誇りが必要だろう。それは発展や創造のエネルギーの阻害要件にもなりかねないが、文明の進歩発展は、人間の幸福感とかならずしもパラレルな関係たりえぬ事実も看過するわけにはいくまい。古くから中央にあこがれて郷土をさげすみ、近代の知識人たちは欧米先進諸国の文化諸制度をひきあいに出して、自国のそれを否定することしかなかった。そしていちおう近代文化国家の形をつくりあげてきたのだが、そんなわが国に、ゆたかな個性的文化など成熟するはずはないのである。

『海よ 地中海よ』は、著者とともにイタリア半島をめぐる歩き、料理や地酒を味わい、場末のレストランのおやじと語る楽しみに時を忘れさせてくれるだけでなく、右のような反省に読者をさそひ込むものがある。その表題は、あるいは多少奇抜かもしれない。しかしわたしは、異郷にある者がふる里にむかつて呼びかける声を聞く気がする。著者の、イタリアへの心酔は尋常ではない。わが国の現実がやりきれないのではないか。

（河野仁昭・大学学生課長）

(河野仁昭・大学学生課長)

本が若干千歳されており明治六年（一八七三年）より前の出版で田中不二麿一行と共に米欧を回った時に参照し得たであろうものか数点存在する。その一は「the General Statutes of the Commonwealth of Massachusetts relating to the Public Schools...」ひょっとしたら新島の書き込みがあり、内容は「理事功程」第一巻其の二麻沙朱色州教育規則から始まって書庫に終る項目通りである。その他「Washington Public School Report, 1866-70」が残り、れており、「理事功程」第二巻中のワシントンのの公学校規則がこの書物の中に見える。ただし、この書には書き入れ等はない。また、この「理事功程」に載せられた法規より年代的に若干古いので「理事功程」のために参照したはは次年度位のレポートでないかかと考えられる。手沢本としてまた「the American Colleges and the American Public-by Noah Porter」がありその最後の参照文献の項の「Schools and Universities on the Continent, by Matthew Arnold, 1865」に特に青色のアンダー・ラインが施してあった。そして明治六、七年六月下旬アーノルドに会っているのであるから滞欧中に読まれた可能性が大きいのである。

以上今日までわかったことを簡単に記した。一層詳しくは小林助教の「比較教育学的研究にまつところ大である。当史料編纂所としても国立公文書館等にてこの関係資料をより明確に把握しておきたいと念願している次第である。

戸川晴之著

『英文表現法』

研究社、B6判
四七四頁、一、五〇〇円

著者は文学部英文学科の教授であり、同僚である小生が、同氏の新刊書をご紹介できる機会を与えられたことは喜びに堪えないところである。昨年の秋出版された「英文表現法」は著者の長年にわたる實際授業の経験から生まれたもので、四七四頁に及ぶ努力の結晶であり貴重なものである。

構成からは講義と演習の部に分かれ、前者では修辭と表現、語と文、語の選択、語の配列、強調の手段の順で解説があり、強調手段では一九項目に及んで修辭学上の専門語について例文による説明がなされている。そして、「以上文意を効果的に伝える場合の手法として現代文に用いられているものを分類して述べたのであるが、このような手法を念頭において、文の調子をくず

さないような配慮の上になつて、文中のポイントを強調することが表現の要諦である」と結論されている。

演習の部では、自然、人間、生活、人生・宗教、学芸・文化、社会の項目のもとに約一三〇字の邦文一〇〇が与えられ、a、b、cの能力差ある数校の大学生（aは四年生、bは三年生、cは一二年生程度）によるAとBの二つの試訳がかかげられて、その各々について懇切な訂正や忠告が解説として与えられている。最後に著者の試訳が与えられて一つの練習題は終る。なお演習の各項目の間には著者が現代作家たちから集められた関連範例文がおさめられている。

さて、この「英文表現法」の目的を考えて見ると、これは単に邦文の意味をパッサブルな英文に変える和文英訳の演習ではなくて、与えられた邦文をよく咀嚼玩味して邦文のもつ微妙なニュアンスを英文に表現する演習を目ざした高度のものである。修辭学を踏まえながら、周到な注意と充分な時間をかけてより立派な英文を書くことを願う人々が利用できる書物である。従つて

読者はかなり教養のある人でなければならぬ。著者戸川教授は失礼ながら英語のニュアンスに対しては鋭い感覚をもった人であり、長年の経験を経て教養ある英語国民よりすぐれた程度に達していられると思う。従つて各題の学生による試訳に与えられた解説部はこの書物で最も読み応えのある部分であり、又最も力を入れられているところなので、克明に読めば読者は語の選択が如何に微妙なものであるか、前置詞一つでも全文に及ぼす影響がどんなに大であるか判ると思う。

情報過多の時代にこのような努力は不要と思う人があるかも知れないが、将来英語をもつて思想表現を志す人々は、単に意志を通じるだけならいざ知らず、相手の心をつつ表現を望むならばこのような書物を克明にひもとくべきである。特に人文に関する翻訳を志す人々にとっては好個の指導書であると思う。このような意味からこの書が斯界に寄与するところは多大であろうと信じるものである。

（谷口敏郎・大学文学部教授・

ヘミングウェイ研究）